

夏期のセミナーを受講された先生方へ

“質疑応答集 2016”では書ききれなかったこと

○セミナー受講お疲れ様でした。そして、本当にありがとうございました。今回の小論文のセミナーは、おそらく数ある入試問題の中で最も難解だと思われるものを主として取り上げてみました。講義の最初に申し上げたように、受講者が一人もいなかったらどうしようという思いもあり、教室に入り、みなさんを見たとき、安堵と同時に身が引き締まりました。こんな感覚になったのは初めてかもしれません。また、事前アンケートに“非現実的なこと”を書いておいてくださいとお願いしたところ、多くの先生方がそれを書いてくださいました。何らかの形で生かしたいと思っております、本当に。

○教師が、指定字数以上の小論文を仕上げるのにどのくらいの時間をかければいいのか。また課題文に線を引いたりするのか。

教師は受験生ではないので、時間を気にする必要はないと思います。私の場合は、次のような流れで解答例を書いていきますので、ご参考までに書いておきます。

1 問題文を設問とともに 2 回くらい読んで頭に入れる（問題によって時間は変わってきますが、今回の慶応の場合は 30 分ちょっとでした）。

2 電車や飛行機での移動中にアイデアや構成を考える

3 隙間の時間で一気に書き上げる（30 分くらい）

課題文中に設問に必要なところがあれば、そこだけ線を引く

これはあくまで、生徒に示す解答例であって、セミナーのテキストの場合は、構成・時間配分等を考えながら執筆・編集しますからかなりの時間を要します。

○小論文の採点基準を教えてください

採点基準は大学によってまちまちでしょうが、おおよそ「国語表現」で学習する事項に沿って以下のように作ってみました。以下の基準を 80%以上満たしていれば、まず小論文学習は完成と行ってよいでしょう。

採点基準（50 点満点換算）

課題への回答が適切か（答案としての適切度）

0 点 課題の要求と全く合っていない

3 点 課題の要求との合致が半分以下である

5点 およそ半分合っている

8点 ほぼ合っている

10点 合っている

わかりやすい論の進め方か（思考の展開の適切度）

0点 論点がどこにあるか不明瞭で何を言いたいのかまったくわからない

2点 記述内容はわかるが、何を言いたいかわからない

4点 部分ごとの主張は通っているが、部分同士の論に矛盾がある

5点 内容的には問題がないが、自分の論よりも、知識に偏重している

8点 持論の展開には問題ないが、やや具体性に欠けたり、具体例が多すぎたりする

10点 論の進め方に関しては明瞭である

表現や語句が適切であるか（国語表現の達成度）

0点 文章体としての体裁を備えていない

3点 文章には問題がないが、楷書体で書かれていないため、判読不明の文字が多い

5点 適切・不適切が半々である

7点 若干不適切な点が散見される

10点 問題なし

総合評価

0点 原稿用紙の使い方をはじめとして、字体・文体、論の進め方、持論を展開するなど、小学校からの学習が欠如している

10点 基礎学力はクリアしているが、学年に応じた高等学校での学習があまり反映されていない

15点 概ね問題はないが、若干問題があり、指導を必要とする

20点 問題なく、大学においても高い水準のレポートないし論文が期待できる

○学校の生徒は皆が皆、東大・早稲田等を受験する生徒だけではない

今回の講義は、「最も予備校らしくないテーマだけれど、最も予備校講師に必要なこと」をやろうというのがテーマでした。言い換えると「受験指導のノウハウという表層的なことをやらず、受験指導のプロが持つべき力」を披瀝すると

ということです。何年もこのセミナーを通して感じてきたことがあります。事後アンケートに毎回皆様の多くがお書きになることが三つあります。

1 大変有意義で得るものが多かった。明日からすぐに使えそうです。

2 私の勤務校は生徒のレベルが低く、慶応や医学部を目指す生徒を教えていないので、現実的には役に立たない。

3 初めて進学校に勤務し、指導法がわからなかったが、やる気が湧いた。

ここに共通するのは、

1 受験指導と教科教育は別物だから手っ取り早いものが欲しい

2 生徒のレベルが低いなら、それなりの指導法があるはずだ

ということではないでしょうか。だいぶ厳しい見方かもしれませんが、先生方には先生としての人生があるはずで、心のどこかで、「定年までそれなりの教師人生を送ればいいかなあ」と考えてしまい、即効性のある方法を求めるなら、一度限りの人生、もったいないと思うのです。生徒のレベルがどうあれ、一切妥協することなく、自分を究極まで追い込んで磨いていくのが教師ではないでしょうか。自分に力があれば、自ずと生徒一人一人の力や性格や生き方に応じて、きめ細かい、変幻自在？の指導ができるのではないのでしょうか。これはあくまでも私の持論でもあり、理想でもあり、生き方でもあります。予備校講師は、常に考え続け、自分を磨いていかななくては生き残れない職業です。他の講師と競争し、蹴落とすようなことはしません。仮にしたとしたら、次年度教壇には立てないのです。どうか、生徒が一生かかっても手の届かないような実をつけてほしいと思いますし、これからセミナーの担当に当たれば、こんな思いで語ろうと思っています。

○来年で代ゼミ講師になって30年、還暦を迎える私にとって、私より若い（ほとんどの先生方そうだと思います）先生方に、目前の表層的なものにしがみつ়くことなく、自分を磨いていって欲しいという思いから企画立案したものです。

何度か講義のときに触れたかと思いましたが、父は、とある高校の英語教師でした。60歳で定年になった途端、癌で逝きました。生前「予備校講師は所詮予備校講師、今からでも遅くはない、高校教師になれ、人に貢献できない職業などやめちまえ」など、いつもきつい言葉を言っていた父を見返したいという思いで今日まで生きてきました。どうか、これから何十年も続いていく教師人生を確実に歩いていくきっかけにしてください。もう今となっては高校教師に

なる年齢ではなくなっていました。父の寿命を越えんとしている私が先生方に何が語れるだろうと苦しんだ結果が今回の講義でした。

根底からの力をつけていこうという真摯な思いを持つ先生方が増えてくだされば代ゼミ講師冥利につきます。ありがとうございました。

